

【同窓会 50 周年記念投稿】

「これまでの高専そしてこれからの高専」

2M 中尾 充宏 (前校長)

平成 22 年 4 月に、はからずも母校の校長として着任し、当初長いと思っていた 6 年の任期はあっという間に過ぎ去り、28 年 3 月をもって第 2 の高専生活を終え、早や 2 年が経とうとしています。赴任した当時、40 数年ぶりに戻った母校は、そこに集う学生・教職員はもとより、建物や自然・社会環境なども大きな変貌を遂げていましたが、一面で伝統として受け継がれているものもまた意外に多いと感じました。

そして何よりも驚いたのは、実験実習に重きを置いた 5 年一環教育がもたらす高専の教育成果を目の当たりにしたことでした。

それは単に教育システムの形式やカリキュラムの中身だけではなく、学寮生活、部活動の体験、自主的な学生会活動、担任によるきめ細かな修学・生活指導といったものすべてが集積された結果であります。また、これらの指導が一般科目を含めて、最先端の研究を経験し、大学に比べても遜色ない研究者マインドをもつ教員団によってなされていることです。この教育環境で育つことよって、高専生には「技術をもって社会に貢献したい」という特有の技術者精神「高専マインド」が自然な形で植え付けられるのです。これは技術の変遷著しい産業界にあっても時代を超えて常に通用する、言わば「人間力の涵養」であり、普遍的な価値をもつものであります。それ故に産業界からの高い評価が定着し、最近では欧米を含めた諸外国からも注目を集めるに至っております。

しかしながら、最近の少子化と高専関係予算の止めどない減少による影響は深刻であり、一方で教育のグローバル化や高度化に十分対応できていないといった批判も出ております。

こういった社会情勢には適切に対応して行かねばならないのは勿論ですが、その実施に際しては、高専教育の本質が損なわれないよう慎重な配慮が必要であると思われれます。

せっかく設立当初に予想した以上の良き伝統を築き上げてきた高専が、今後とも健全な発展を続け、真の意味で「進化する高専」であって欲しいと願うものです。

水害や事件の 1967(昭和 42)年の赴任

元教員 一般科目 野本 晃史

50 年の永い間失禮して、申し訳ありません。

赴任の頃は高校生徒の、次いで大学生急増の時でした。大学の教育学部でも整備充実し対応する動きがあり、大学院の新設も計画されていました。

小生は教育系大学院修了でしたので、全国的な人事異動の波に流され、高専勤務は昭和 42 年度の 1 年間のみでした。

今は亡き日本史専攻の外山幹夫教授の助けで資格ありとして赴任させて頂きました。

高専では、機械科 1 年の担任で、地理専攻なので、地図やグラフ描図を指導。他に倫社を担当。休日は「えぼし岳」に学生と登山。佐世保市内も巡検。古墳も見学。この年早害と大水害。佐世保市内の死者 29 名、負傷者 270 名。諫早の学生宅をはじめ見舞。大量の泥土で当惑。

昭和 43 年 1 月には、米原子力空母エンタープライズ入港もあり、全国から佐世保へ集結。高専も危険だとして校庭に有刺鉄線。授業も断続的。授業の無い日は隣接する自動車学校へ。免許取得し、九州各地の温泉調査。大学院在学中、全国の温泉踏査論文が運輸大臣賞を受けたが、補充調査で九州各地の温泉地調査。離島からの高専生が多く、寮生の宿舎での夕刻の談合が楽しかった。転勤したら、大学紛争が全国的となる。

バドミントン部顧問の思い出二つ

元一般科目(英語教員) 古賀範理

1976 年バドミントン部の顧問となって 1993 年に高専を退官するまでに、中断を挟んで十数年間顧問を勤めたが、特に印象に残っている思い出が二つある。

一つは、全国高専バドミントン大会で 1987 年の第 11

回大会から第 13 回大会まで三連覇したことに遭遇したことである。この 3 年間の主力は渡邊清隆君であった。3 年次生と 4 年次生の時は、先輩の井手、西村、辻の諸君と協力し、最高学年で出場した新居浜大会では、浜野、大久保、藤本の諸君とともに 3 年連続優勝の原動力となった。この年の九州大会では、決勝で熊本電波高専に敗れ、地区大会 2 位で全国大会に出場したが、部員すべてが全国大会で雪辱するという強い意気込みを持っていた。米子高専、福島高専を 2-0 で退け、決勝では期待通り熊本電波と対戦し 2-1 で下して有終の美を飾ったのである。

もう一つの思い出は 1989 年佐野良久君が九州大会、全国大会に出場できたことである。

当時、各高専では女性の部員が少数で、チーム編成が出来ず技量が抜群であっても女性が公式大会に出場する道は閉ざされていた。大会規定では出場資格が男性と明記されていなかったのも、まず九州大会の監督会議に諮り、佐野君が個人戦への参加することを認めて貰った。佐野君は 3 位の成績を収め、全国大会個人戦にエントリーする資格を得た。

全国大会組み合わせ抽選前の監督会議で、佐野選手は個人戦に参加する資格があることの確認を求めた。名前から男性と思い込んでいた監督がいて、会議がやや紛糾したが、最終的に地区大会の成績が重視され参加が認められて。試合では彼女は 3 回戦まで勝ち進んだ。

対戦相手の男子学生はゲームがやりにくそうであった。その 2 年後から正式に男女別に試合をするようになり、佐野君は男性に混じって試合をした最初で最後のケースとなった。

佐世保高専同窓会 50 周年を祝して

一般科目(英語)名誉教授 加藤 克彦

11 月 4 日、中田同窓会長の挨拶で始まった富士国際ホテルでの写真は、東田高専校長を初め、皆、いい男いい女の雰囲気を出していると言え言い過ぎでしょうか

定年後の非経済的活動で、「高等遊民」的生活を送

っている人間は、歯磨き人生の如く死ぬまで働く、いや、働かされる人達とは人種が違うのでしょうか、原稿書きも、存外、歯磨きと同じかもしれません。では、同世代の教官の代わりに一筆もの申してみます。

振り返れば、佐世保高専との縁は、教員人生の前半最後の勤務校であった長崎西校に在職していた、英語の佐野先生、数学の糸岐先生が先に栄転されていたからでした。他の高専から誘いが佐世保より以前にあったのに、わがままを言って断っていたのが、佐世保の引力と自分の研究への本格的取り組みの機が相互に相俟って、それが熟して赴任が実現したのです。

卒業生の皆さん、同窓会を楽しむ余裕が出来てよかったですね。あなたがたの中には、技術の強みを生かして、起業家になる人が増えているようです。今回再会できた。

35 期 M の古川君、32 期 E の三谷君らが起業家と言える。27 期 S の井手君は造船マンになっていたが、英会話クラブに所属していた。同じクラブの大島君は九州地区英語弁論大会で名を高めることになった。野球部の顧問の時、引率の仕事をして、スポーツマンはいいなと感じたのが、定年後、硬式テニスをやすることに繋がったのです。おかげで、テニスは面白くて、よぼよぼになるまで止められそうではありません。

今回 41 期生 S のブヤンジャルガル君を知ることになった。なんと、彼は母国モンゴルで日本式の高専を導入するのに貢献して校長を務めているとのこと。これもまたアントレプレノールだね。高専も国際的な知名度が高くなり慶賀の至りです。佐世保が、かつて、重要な日本の海軍基地で、今では、アメリカ海軍の基地と共存しているように、文化の分野でも共存は望ましいことかもしれません。ナショナリズムの象徴から一転してグローバル化への道は、次にまたナショナリズムへという変化に晒されていくのでしょうか。

5 期生の中島洋三氏はお元気に活躍中で、同窓会の中核の貫禄が出ていました。他の高専出身の八代、大分、有明の来賓の方々とも同じテーブルで話す機会がありましたが、皆さん錚々たる人という印象を得ました。熊本は八代と電波が勝手な国の統合によ

り、無用な摩擦を生じているようで、同情を禁じ得ませんでした。どちらが廃校になるわけでも無く仲良くやってほしいものです。金沢で設立準備がなされている国際高専では、外国人の校長が、英語に強いグローバルな人材を養成する学校を目指しているという記事を新聞紙上で読んだことがあります、高専の多様化の波が進行しているようです。

長崎新幹線が開通して、人の流れが加速する頃、中央も地方もあまり差がなくなっても、技術交流、文化交流の根っこの部分が大変重要です。私は、今もなお、西洋文学にどっぷり浸かっていますが、日本語が基盤であることには変わりありません。因みに、類人猿の研究で有名な、京都大学の学長は、発想の根源にある日本語がいかに重要か指摘しています。

それでは、皆さんの今後のご健闘を祈ります。

漕艇部の歴史

漕艇部顧問 松尾秀樹（一般科目・教授・英語）

漕艇部は、1967年（昭和42年）、学校創立から6年目にボート同好会として発足したのが始まりである。学校の横に日宇川があり、約400m行くと佐世保湾があり、川でも海でも練習できる環境に、当時の葛西校長も創設について積極的であったという。1974年に漕艇部に昇格し、艇庫も完成したが、それまでは化学工学第一実験室に艇を置き、リヤカーでナックルを河口まで運んで練習していた。1998年（平成20年）に廃部の危機があったが、2011年（平成23年）にインターハイ男子シングルスカルで準優勝などの戦績を残し、部としての存続を果たしている。

今年、創設50周年を迎え、2017年（平成29年）8月27日（日）に、約80名の出席者と共に50周年記念式典行事を行った。学校創立50周年記念の八角堂の外壁に飾った記念プレートの除幕式とOBの寄付によって購入したシングルスカル艇の披露を行い、その後、会場をミニッツパークに移し、保護者会主催のBBQパーティーを行った。乾杯発声は、創設当初より40年以上顧問を務めた山邊国昭先生が行い、50年の歴史を振り返りつつ、出席者のお互いの親交を深めた。



1994年卒業アルバムより



佐高専創立50周年記念行事より

【同窓会報「うず」創刊号より抜粋】

同窓会、会誌創刊を聞いて

初代校長 大脇 策市

同窓会においては今般会誌を発行されるとのこと誠に結構なことで衷心からお喜び申し上げます。会員諸君には益々ご壮健で各方面で活躍されておられるのを想うと諸君の在学当時いいかえると学校創立後の数年間の種々なことが走馬燈のように次々に浮かんできて懐かしく感ずる次第であります。それで次に追想の記のようなものを書いて会誌発行のお祝いのおよろこびの言葉にかえたいと想っています。諸君においても高専在学中の五年間は少年から青年への転進期であり、体調、精神およびものの考え方の変わる時期、言いかえれば人生における最も大切な時期ともいうべき時であったろうから佐世保の学級生活は種々想い出の多いことであつたと思うのであります。

私は昭和34年3月に四十余年の、教員生活をやめて静かな生活に入っていたのであるが新制度の高専が創立されるということで、すすめられて第一期校の佐世

保に昭和 37 年 4 月に赴任しました。私としてはこれまで経験のなかった年頃の学生の学校に勤めたこととはじめはなんだか調子が出ないようなこともあったが自分が経験していた青年期の学生に対する学問だけに重きをおいた仕事よりも心身共に発達しつつあり考えようではたえず前に向かって動きつつあるともいえる学生諸君に接して仕事をするという高専での日々は私に新しい生き甲斐を与えてくれました。

この制度の学校はわが国立としては初めてのものであったからこそそれに関する経験者と称されるものが極めて少なかった。

本省、全国国立高専校長会、および教職員の頭脳を結集してきた。これを基盤として教えながら、ある時は教官相互相集まって相談研究して学問研究、技術指導、豊かな人間性をより高く深くしようとする努力を積み上げてきたわけで、私の在職期間五ヶ年に於てこの目標が徐々に達せられたものと思う。すなわち佐世保高専の創立以来この場に勤めた多数の人々の努力およびこの場で学んだ多くの学生諸君の精進によって築き上げられたものと思うのであります。

学校が生まれてから相当の年月が経過すればそこに特有の校風、伝統が出来るものであるが佐世保高専は、未だ若いのでこれ等をとりあげて示すほどにはなっていないかもしれない。しかしその時点においてのその芽生えは既に出来ておりそれが漸次成長しつつあるものと思われるのであります。今後も学校に関係のある人々がこの芽生えを大切に知性と愛情を以てあせらず積極的に育てて行くように努めてもらいたいと思っております。

この校風、伝統は他から移植されるべきものでない。否移植しようとしても移植され得ないものである。その学校、その土地そしてそこで教える人、学ぶ人および卒業して社会で活動している人達のすべてに関係のある何物かが総合されて出来るものではないでしょうか。同窓会員はその学生時代および卒業生としての各々の立場に於いて校風、伝統の樹立一役買っているように思われる。この校風、伝統学校がその生命を永遠に示すものといえましょう。

終りに会員諸君のご健康とご活動を祈りますと同時に校風、伝統の樹立に努められますようお願い申し上げます。

【同窓会報「うず」創刊号より抜粋】

佐世保工業高等専門学校同窓会誌の創刊に寄せる

二代校長 葛西 泰二郎

このたび佐世保高専の同窓会誌の創刊号が発行せられるにあたり、一文を寄せるようにとの依頼を受けた。私は大脇策市初代校長のあとをうけて、昭和 42 年 4 月から昭和 44 年 9 月まで満二年半の間、佐世保高専校長として教官、職員、学生諸氏の和気溢れるような雰囲気の中で、明るい気持で大変愉快的な思いで日々を過ごすことができたことを感激にも似た思いで追想している。昭和 2 年九大工学部を卒業以来、九大で過した四十年の年月は決して短いものではなかった。しかしその間は研究に明け暮れていつの間にか過ぎ去ってしまったような思いである。佐世保高専在籍の二年半は決してながいものではない。それでいてその二年半が私の人生に全く忘れ難いなつかしいものとなってしまったことは何故であろうか。佐世保の素晴らしい景色、うまい空気と、うまい魚、人情のこまやかさ、これらもその原因の一要素になっているわけであろうが、しかし何といたっても佐世保高専のキャンパスに溢れていた教職員学生の和からかもし出されたあの雰囲気が私の一生の記憶から去らないことになってしまったのではあるまいか。僅か二年半で、佐世保高専を去ることになったのは名残りも尽きぬ想い出があった。しかし大隅次期校長を迎えることが出来、また宿願の運動場用地も確保することが出来た由で本年度はその整備も進められるであろう氏、佐世保高専の今後の発展に大きく期待が持てることは、嬉しい極みである。贈って頂いた名簿を調べると現在の同窓会員の数は機械科が 363 名、電気科が 184 名、工業化学科が 36 名計 583 名のようなものである。しかも皆健康のようであることは嬉しい。今後この同窓会諸氏がますます元気で産業界に活躍せられ我が国の工業技術の大きな手となり大いに活躍せられることを心から祈る次第である。ところで私が現在在任する九州工大には名専会と称

する同窓会があり会員の数は旧名専と現在の九州工大を合わせてあと僅かで一万名を越えるという所である。名専会報とよぶ同窓会報が毎月発行せられ、安川第五郎先生から譲り受けた広大な敷地を持つ名専会館という同窓会館があって会員の宿泊や集会に供せられている。また創立五十周年および六十周年の記念資金が募集せられ、若い教官の他大学における勉学や教官の国際会議派遣など好ましい活動が続けられている。こういう同窓会は全国的にも珍しい存在と思われるが佐世保高専も同窓会が年とともに盛大になって、このような好ましい活動ができる日がこないものかなと密かに心に期している。

佐世保高専同窓会員諸氏のご健康とご活躍を心から祈る次第である。

【佐世保高専 10 年史より転載】

佐世保高専十年史 序

三代校長 大隅 芳雄

昭和 36 年 6 月、高等専門学校制度を創設するための学校教育法の一部を改正する法案が、国会を通過し、公布された。これに伴い、激しい高専誘致の運動が全国的に展開されたが、翌 37 年 1 月 10 日、全国十二の地に国立工業高等専門学校を設置することが決まり、九州地区では、ただ一校、佐世保に開校されることになったのである。

九州地区最初の高専である本校の創設に当たって、九州大学が世話校になったが、たまたま当時九州大学工学部長であった私は、その職務上、佐世保工業高等専門学校設置準備会の委員を委嘱された。昭和 37 年 1 月 18 日、文部省に於いて開かれた高等専門学校設置準備会に出席した私は、当時の技術教育課長犬丸直氏から新しい高専制度について説明を聞いた。翌 19 日には、小林学術局長室において、各高専個別に打合せが行われ、佐世保高専設立について具体案の大綱が示された。世話校としての九大に課せられた役割は、校長はじめ教官候補者の選考であった。

まず初代校長として大脇策市氏を推挙し得たことは望外の喜びであった。それに引き続き教員候補者選

考委員会も回を重ねて教官候補者を選んだ。

当時の佐世保市長故山中辰四郎氏が、高専誘致のことで、はじめて、九大を訪ねられたのは、前年 9 月のことであったが、その後も数回にわたり来訪され、終始地元の熱意を示されたことは、今なお印象に残っている。

以上のように、本校創設にあたり、世話校の一員として、それに携わった私は、その当時、本校に職を奉じることなど夢想だにしなかったことであったが、はからずも葛西校長の後を受けて、三代校長となり、ここに記念すべき創立十周年を迎えたことは、誠に感慨深いものがある。

顧みるに、本校が佐世保市立高等学校（定時制）の一部を仮りの校舎として開校式を挙げた当時は、校長以下教官 11 名、事務職員 12 名、学生も機械工学科 85 名、電気工学科 44 名、計 129 名という小さな学校であった。しかし施設設備も整わない中で、教官は新しい教育制度確立熱意に燃え、13.5 人に一人という狭き門を突破して新しい学校に集まった学生の意気も旺んであった。

爾来十年、年と共に施設設備も整備拡充され、現在では管理棟ならびに各学科棟、実験実習棟、図書館、体育館、武道館などが競い立ち、これらの建物の総延面積は 14,749 m²に達している。また学寮は四棟、7,523 m²、収容定員 560 名となった。創設当初よりグラウンドが狭く、校地の拡充はかねてからの念願であったが、幸い昭和 45 年 3 月、24,564 m²の隣接地の購入ができ、そこには 400m トラック、フィールド、テニスコートなど備えたグラウンドが最近完成し、校地の総面積は 100,939 m²となったのである。

学科も昭和 41 年工業化学科が増設され、現在の機械工学科二学級、電気工学科、工業化学科それぞれ一学級の三学科四学級となり、学生定員も 800 名、これに対して教員定員は、校長以下教官 60 名、事務職員 76 名となった。

この間、昭和 42 年 4 月に第一回生を社会へ送り出して以来、本年の第六回生に至るまでの卒業生総数は 723 名に及び、それらの卒業生は、それぞれ産業界の第一

線で活躍しつつあることは誠に心強いものがある。

また本校初期の学生によって培われた淳良の校風とクラブ活動における優れた伝統は、代々受け継がれて今日に至っている。

いうまでもないことであるが、こうした本校発展の陰には、この十年間の教職員のなみなみならぬ努力があり、その労苦はいっぺんの序文で簡単に書き尽くせるものではない。

創立以来、幾多の障害と困難があったとはいえ、わが佐世保高専十年間の歩みは、近代日本の学校の歴史中でいえば、むしろ恵まれたものであったというべきであるかも知れない。高専制度は発足以来十年にして、その基礎を確立し、卒業生に産業界の評価も高く、この教育制度の成果も一応社会の認めるところとなった。

しかしながら、この十年の歩みを通して、高等教育における高専の位置づけとその教育理念をはじめとし、種々の困難な問題が次第に姿をあらわしつつある。高専制度のよりよき発展のためには、教育理念の確立が必要である一方、早急に解決を迫られている現実的な問題もまた少なくないのである。われわれは十周年にあたり、教官の定員増と待遇改善、研究費の増額、施設設備の拡充その他、国の施策の抜本的改善を念願するとともに、この十年の経験を活かし、教育内容の充実、教育方法の改善向上をはかり、より一層教育の効果を挙げるべく覚悟を新たに、最善の努力を尽くさなければならない。

ここに「佐世保高専十年史」を刊行し、創立以来の本校の歩みを記録にとどめると共に、その記録が本校の、さらなる高専制度の将来の発展を考えるための足場になることを祈ってやまない。

(大隅芳雄氏は 2016 年ノーベル賞生理学・医学賞受賞の大隅良典博士の御尊父)

【佐世保高専 10 年史より転載】

「校歌縁起」

校歌作詞者 本校国語元教官 高橋 和彦

校歌の歌詞が募集されたとき、私の心にまっさきに浮かんできたのは万葉集の次の歌であった。

わたつみの 豊旗雲に 入日さし 今夜の月夜まさ
やかにこそ(巻一・十五)

これは天智天皇のあの大和三山の歌の反歌の一つであるが、左註に「右一首歌、今案不似反歌也。」とあるように、歌詞から見ても、恐らくこれは反歌ではなくて、独立した一首であろうと思われる。それはともかくとして、この歌は、海上にたなびいている美しい雲に入日がさしており、今夜の月はどんなにさやかであろうか、という意味であろう。いかにもすがすがしく、おおらかな力強い感じの歌である。

湖と雲と太陽。単純で素朴であるが、これらの調和した美しさから今夜の月の美しさが生まれてくるのであり、未来がそこに開けてゆくのである。この日本の古代の人々の心を何とかして校歌に再現したい、そして、万葉のあの海と雲と太陽とを歌詞の上に受け止めておきたい、と、こう思ったのである。

幸にも佐世保は西海国立公園の中にあり、海と雲とはまさに万葉の古代さながらに美しい。歌詞は美辞麗句を避けて、出来るだけ単純な形にしたい。しかもそれは静止した美しさではなく、動いてやまぬもの、みなぎる力を内にたたえたものでなければならぬ。こう念願しながら筆をとったのであった。

作詞者としての私の願いがいくらかでも現れていると、これは作曲者の力によるものであり、心から感謝に堪えない。校歌はやはり多くの学生が心をあわせ口をそろえて歌ってこそ、本当に生きてくるものだと思う。この歌が未来に向かって多くの学生によって歌いつがれることは、作詞者としてはこの上もない喜びである。

校歌

作詞 高橋和彦

作曲 森脇憲三

- 一. 雲流る 雲流る
火の国の果て
この地 麗し
海青し 海青し
心ゆたけし

ちから あわせむ

若人ぞ われら

二. たゆみなし たゆみなし

学びの道に

使命^{つとめ} いや益す

光あり 光あり

佐世保高専

ゆくて はろけし

若人ぞ われら

【同窓会報「うず 2号」より転載】

若きら

学寮寮母室主任 宮田 トヨ

- ・脱ぎ捨てしスリッパ揃ゆ微か温もりのあり今出でし寮生の
- ・球技大会にて授業はなしと二十歳笑顔送り出す霜白き朝
- ・限られし休暇をさきて若きらが集ひてくるる迎春の宵
- ・若きらに囲まれ校歌高だかと六十路の吾の迎春の譜
- ・東指し西指し帰る教え子に来年の新春約す握手を
- ・基地建設のチリーより帰る若者が吾に土産とコイン5枚を
- ・大阪の訛り少しく交じらせて電話かけ来新卒の学生が
- ・昨日手術の学生見舞ふ窓ぎはに花売る人の声はばかり
- ・朝の点呼終りて課業のランニング陽に向ひ走る寮生五百

佐世保高専二十年史より抜粋

学寮教官当直日誌

- 47年10月8日 夜半、ジャコビニ流星群を見る者多し
- 48年1月19日 夕点呼後、うどんを食べに行くため外出を願い出る者あり。認めず。
- 48年6月18日 11時30分、娯楽室のテレビがやかましいので下りて見ると10数名が「11PM」を見ている。驚き、解散させる。
- 49年5月30日 午前1時、談話室で宿題をする者、廊下にしゃがんで日記をつける者、便所のふみ板に腰を下ろして読書にふける者、高専にもユニークな男がいるものだ。

49年6月7日 B棟307〇〇、夕点呼時不明。24時不在。無断外出?翌朝6時30分不在。無断外泊?同室者に尋ねても解らない。家出(寮出)かも知れない。

51年1月13日 風邪罹患者多し。校医の診察を受けた者40名以上。39度以上の発熱者3名。

風邪蔓延防止のため、当分23時消灯、朝の集団課業を止め、廊下点呼とする旨伝達。自宅が近い患者に帰省を呼び掛けたところ、約30名帰省願を出す。

51年5月6日 1年生1名、消灯後電話ボックス内で学習していた。連休中遊びすぎて、明日のテストの準備ができていないからとのことであったが、翌朝早朝に行くように言って帰室させた。

51年5月9日 今日母の日なるを以て、寮生会役員は、寮母、栄養士、炊婦などの女子職員にエプロンを贈り、部屋をカーネーションで飾るなどの心尽しをしていた。感心させられた。

51年5月26日 排水処理施設の裏に約30本のタバコの吸殻あり。洗濯場裏に比し、喫煙場所としては勝る感あり。

51年6月8日 酩酊者とおぼしき通行人2人、N棟各室点灯の壮観に打たれたか、「皆さん電気代がもったいないですよ。早く消しておやすみしましょう。」と叫ぶこと数回。これに対しN棟寮生2,3名が調子を合わせて応答す。

51年6月9日 テレビ映画「七人の侍」を見る者、C棟娯楽室に満つ。

51年6月28日 22時前後のN棟の自習状況は、極めて悪かった。試験終了後ということもあろうか。ほとんどの者が雑談、夜食、漫画耽読に時間を費やしている。中に例外的に4人全員が静かに勉強している部屋あり、印象的であった。

51年7月7日 竹に色紙を下げ、七夕飾りをしたる部屋あり。

51年11月18日 22時より2年生寮室巡回。翌日の科目が予習を要するためか、約7割の学生は机に向かっていた。独乙語をやっている者最も多し。文庫本等読んでいる者10名以上。

寮の図書室の本はかなり活用されている。読んでい

た本、「雪国」「女の一生(山本有三)」「火宅の人」「どてらい奴」等。

51年12月5日 寮内の犬一匹、猫三匹、学生によくなついているようだが、何とかしなければならぬようだ。

51年12月7日 試験前日課に入る。当直教官2名手分けして全寮室巡回。試験前の緊張感あり。寮生の9割以上が勉学に精励していた。

52年10月30日(日直) 寮生ソフトボール大会。22チーム参加。教職員チーム準々決勝進出

53年1月19日 石焼いも、タコヤキ等の物売りがよく来るようになった。対応策を考える要あり。夕点検後、門を出て買おうとする者4,5名。注意す。

53年5月25日 1年生寮室汚し。2年生以上の寮室更に輪をかけて汚し。

53年7月5日 百足にさされた者あり。寮母室を開け、ヒスタミンを塗る。

53年9月24日 19時30分頃、寮の門前に暴走族集結。何事ならんと飛び出すと、これが映画のロケ。うるさくて、5年の指導寮生が文句を言いに来たので、20時40分頃警察交通課に電話する。許可は出しているとのことであったが、一応注意してもらうことにした。その後10分程で終了。

53年11月4日 高専際のさ中、学習している者がいる。

53年11月17日 寮生の1人がバス代不足で帰寮できないでいるから迎えに来て欲しい旨、高天町派出所より電話。ユニード近くの旅館の横に座っていた由。240円を持って出かけ、点呼までに帰るつもりであったが、バス代が値上げになっていて、帰れず困っていたとのこと。

53年11月27日 C棟109室で、喫煙後電気コンロでアゴを焼いているところを見つける。

54年1月27日 寮祭。終了時刻午前2時30分

54年5月30日 23時前、スピードを出し過ぎた車がランド横のカーブを曲がりきれず、学寮前の歩道に乗り上げる。寮生、高みの見物で大拍手。

55年6月30日 ウワサのN棟4階、期待通り汚い。著名な人物に対しては、特別指導が必要なようだ。

55年12月3日 寒くなり、朝の集団課業不参加者増える。(20数名)

55年12月6日 10時点呼後、B棟3階から歌声が聞こえてきたので、行ったところ、次の5名が酒盛りをしていた。(氏名略)7日朝事情を聞いた。

56年2月2日 今晩はどうしたわけか、勉強している部屋が多い。また室内もきれいである。

56年2月4日 N棟副寮長、没収した電熱器等持込禁止品3点を持参する。

56年6月1日 電気科〇〇先生、1E全員に学習の進め方について指導。4年生集会、寮生活全般について注意。本日より試験前日課入る。そのせいか、学習状況おおむね良好。

56年6月5日 20時より21時の間、N棟ロビーのソファに掛け、新聞を読みながら寮生の動きを観察する。点呼終了とともに、電話、給湯器、ラーメン室、売店に行く者ひきもきらず。何故点呼終了がそのきっかけになるのか。寮生の動向に対する民俗学的アプローチが必要である。単独行動は少なく、たいてい2,3人連れだつて動く。これに対しては、心理学的アプローチをしなければならない。そして彼らの電話の長いこと。長電話は女性の特権にあらざることを知る。20時40分、新聞は大方読み終わったが、依然として、電話、ラーメン室、売店は股賑を極めている。長電話は知性欠乏症の一兆候であるという偏見にもとづき、注意す。21時になり、どうやら静穏になる。

56年7月15日 C棟屋上で夕涼みをしている者多し。この暑さでは無理もないか。

56年7月30日 合宿初日。学生主事補の合宿心得の説明後入室。願わくば、日中は晴天にして猛暑、夜は涼風吹き、1日の疲労回復せんことを。1週間の合宿による健児らの体力・技術の向上と無事故を祈る。

56年9月4日 夕点呼後、1年生成績不振者20名と面接す。学習会参加希望者4名あり。

56年10月17日 8時より11時まで、〇〇先生の学習会を集会室で行う。参加者9名。

56年10月31日 1年生A、バイク無免許運転で天神町派出所で補導されている旨の連絡あり、引き取

りに行く。1年生Bのバイクを、免許を持っているとウソを言って借りて乗った由。10時過ぎ、派出所員来寮、調書を取られる。両名の父兄に電話。7日に来校してもらうことにする。両名とも坊主頭になる。Bの免許証預かる。一応反省しているようである。

56年11月23日 連休のためか、土曜日より本日8時30分頃までに、女の子から寮生にかかってくる電話多し。15分から30分におよぶ長電話多く、話を聞こうとせずとも聞こえてきて、ウンザリする。緊急の電話がつかない旨注意す。

57年1月18日 寒い朝であるにもかかわらず、集団課業不参加者は少ない。寮長、指導寮生の努力の結果であろう。

57年2月25日 試験に備えて、当直室に質問に来る学生多し。

57年3月8日 閉寮点検、2時より5時まで、寮務教官による各室点検。10時、残寮生点呼。10時より12時まで、寮生会役員と新年度の打合せ。朝8時より9時まで、各棟および各棟周辺の清掃。9日昼食を以て閉寮す。

第一回卒業生答辞

総代 1M 福田 住武

われわれ佐世保高専第一回卒業生百十五名は、常に安易な道を選ぶことなく、あらゆる障壁に体当たりをし、いばらの道を切り開き、前進する覚悟であります。

われわれの前に道はない、我々の進んだ後に道は出来るのであります。

われわれは自らの力で自らの道を開拓していかなければなりません。

それは工業高専という新しい教育制度の一期生として本校に入学したその日からわれわれに課せられた宿命であったのであります。

ある詩人はこう歌いました。

僕の前には道はない、僕の後ろに道は出来る、ああ自然よ、父よ

僕を一人立ちさせた広大な父よ、僕から目を離さないで守ることをせよ。

常に父の気魄を僕に充たせよ。

この遠い道程のため

この遠い道程のため

恐らく、われわれの進む道は暗中模索の連続でありましょう、五里霧中の毎日でありましょう。

だが、われわれには若さがある

夢がある、そして、新しいものを創り出す開拓精神に燃える闘魂があります。

苦痛を苦痛とせず、最後まで喰いついていく若さとファイトで一途に化学の殿堂に究明の足を踏み入れんとするものであります。

校長先生は常に「巾の広い人間になれ」と教えて下さいました。

われわれはこの教えを守って巾の広いゆとりのある人間としての技術者になることを生涯の目標と致します。最後に五年間にわたる先生方の御薫陶を本日以降はわれわれの新しい職場に、また人間形成の場に生かすことを誓い、本校の限りなき発展と在校生諸君の御健勝をお祈りして答辞と致します。

柔道部練習場の変遷

1M 岩永 豪

昭和37年春、柚木寮に入った一期生の面々緊張の中にも皆やる気に満ちていた中、中学時代のクラブ活動の経験者を中心にこの指とまれ方式で各同好会が生まれていった。柔道部も有段者は一人他は殆ど初心者であった。まさに手探り状態からのスタート。構内の空き地に石ころ等を取り除きマットを敷き詰めた青空練習場、次に守衛所横の車庫練習場(コンクリート床にマット敷)、その中で市内の戸尾道場を紹介され週末はスクールバスで送迎してもらい本格的な練習開始。(指導者は有名な喜多保先生、礼儀作法と基礎を叩き込まれる)。小生は2年の秋から入部したが部員の目標は一日も早く黒帯へ一直線。昇段試験は月に一回行われる月次試合、5ポイント制(試合通算で5人に勝つこと)と形の試験(手技、足技、腰技)に合格して有段者になるシステムだった。特に試合の前夜はどうやって勝つか寮のベッドで色々と考え興奮して寝付けなかった記憶がある(勉強より優先していた時期かも)。一期

生の部員十数名は全員黒帯を締めることができ、又後輩たちも順調に強くなっていった。担ぎ技の得意なファイターK.H.君、内股が切れたG.Y.君、体格に恵まれ運動神経抜群のT.Y.君等多士済々であった。

40年に入り合同体育館もでき、柔道、剣道、空手、バスケットの各部練習場の区分を行いやっと地に着いた練習が可能となった。同年7月佐世保主管の第2回九州地区高専大会開催。一期校の面目にかけても負けられないとの思いで練習に励む(佐世保南高OBで強力な助っ人コーチを招聘、この効果は大きかった)。試合会場は佐世保南高校、全員の奮闘で難敵大分高専に勝利し無事優勝。ホットしたのが皆の本音と思う。翌年は鹿児島県の第3回大会、2連覇を目指し臨んだが今度は大分に惜敗涙をのんだ。42年春、武道場が完成、畳の上には立つことは出来なかったが、壁に掛けてある多くの部員各位の名札を見ると50年余の歴史に想いをはせる。最後に武道場によく見かける「心・技・体」を今一度考えてみると武道はもとよりスポーツ全般、ビジネス、家庭生活にも生かせる金言である。又39年秋(1964年)に市内潮見町の下宿先でTV観戦した東京オリンピック柔道、2020年に再び日本勢の活躍を観れることを楽しみにしている。

母校への思い 50年

1M 里崎 泉次

昭和37年4月、佐世保高専が創立されて、大脇策市校長先生のもとで、万徳町の仮校舎に入学、仮校舎が柚木にあったので、スクールバスでの楽しい通学でした。市営バスの中古車で時々エンジンストップする事があり、その時は、全員バスから降りて、バスの後押しをしてエンジンが始動したら、また乗せてもらうというものでした。昭和38年4月沖新町に新校舎が完成して、この地での学校生活が始まりました。グラウンドは平地にはなっていましたが、多数の石ころが残っており、体育の時間はまず石ころを拾うことから始まったような気がします。そして、グラウンド、校舎の周りには、フェニックスがたくさん植樹されていました。今思い返すと大脇校長先生の深い思いが託されていた

のかもしれませんが。入学当時の体育の授業は、剣道と柔道が主体だったので、中学時代にはなかった授業だったので当時は少し驚きました。でも、今振り返ってみると楽しい授業でした。

2～3年と学年が進むと、体育の時間も、グラウンドを走ることが始まり、マラソンが始まりました。最初の頃のマラソンコースは、東浜、天神を一周してグラウンドに戻るコースでしたが、少しずつ距離が延びて、東浜、天神、大宮を一周してグラウンドに戻るコースとなりました。今では考えられないでしょうが、道路はまだ舗装されていない部分が多く足の裏が痛くなったものです。

機械の実習は、実習設備が整備されていなかったもので、一年間の授業を現在の久留米高専の設備を借りて、数日間まとめて実習させて頂きました。学友と宿泊しての実習だったので、今でも楽しい思い出の一つとなっています。学生生活も5年が経過し、卒業記念として文鎮を作ることになりました。鋳造品だったので、型枠を作り、黄銅を流し込んで形を作り、それを磨いて完成させました。それに、数人の友人の名前を刻印して頂き卒業記念にしたかったです。出来上がってみると、何故か大脇校長先生の刻印も欲しくなり、あつかましくも事情を説明して、お願いすると、気持ち良く応じて頂きその時の感激が今も忘れることが出来ません。

昭和42年4月に同窓会が発足し初代同窓会長を受けた私としては、創立50周年の記念式典が中田同窓会長、川口実行委員長並びに役員方のご尽力及び東田校長先生はじめ学校の関係者の御助力とご支援を頂いて盛大に行われたことを大変うれしく思います。大脇策市初代校長先生が植樹して下さったフェニックスのように、これからも永遠に佐世保工業高等専門学校と同窓会、同窓会員の皆様が輝き、発展し続けることをお祈り申し上げます。

剣道部OBOG会への参加を！

1M 渡邊 康幸

昭和38年2月、部員9名で発足。防具も稽古着もなく、竹刀一つで仮校舎の空き地で、素足でのすり足、

素振りから活動を始めた。沖新の新校舎に移転した後も、練習場の環境は変わらなかったが、土曜日は部長坪田氏（1E）の実家の道場「静思館」（藤原町）に通い、彼の兄さん達から手ほどきを受けた。その後、仮道場が設置（昭和39年）され、体育館の完成を経て、昭和42年待望の武道場が完成した。

2期生には柚木寮に帰寮してからも朝夕の素振りやランニング、休日には隠居岳、烏帽子岳、八天岳までの縦走を課した。縦走登山は、3・4期生にも課し、剣道部恒例行事の鍛錬登山の始まりとなった。

創部から20年間の戦績やエピソードは初代顧問高野一徳先生が10年史、20年史に詳しくまとめている。転載するのがベストと考えるが、紙幅が許さず、図書館等で読み返していただきたい。

平成27年7月、坂本氏（2M）より、九州高専体育大会剣道の会場が北九州高専なので、応援をとの連絡を受け出かけた。坂本氏のほか福田氏（13M）、北口氏（20M）、佐々木氏（33M）の4名が駆け付けてくれた。この時①指導者が不在であること、②OB会を発足させたいとの声を聴き、①については佐世保市在住の剣道部OBに支援をお願いしてはと、高橋氏（4M）、鯨伏氏（6M）の名を挙げていた。坂本氏の尽力で、高橋氏が指導を快諾いただいた。②については北口氏がたたき台を提示されていたので、広くOBOGに呼びかけをお願いした。上記3氏をはじめ、福岡在住の剣道部OBが会合し、同年11月2日に、本校において在校生を含めたOBOG会が開催され、会長に高橋氏が就任、同窓会紙2015と、FB上に北口氏が開設されたHPに写真入りでその様子が報告された。

剣道部OB／OGの皆さん、HPを閲覧され、母校剣道部への支援をお願いします！

よみがえれ 考古学同好会！

1M 渡邊 康幸

昭和40年11月、宮本哲郎氏（1M）、大家栄邦氏（1M）らと語り、34名を集めて発足。顧問に来山多助先生を迎えた。多人数を集めたのは部昇格を念頭においての仕儀であったが叶わなかった。

東浜の丘陵地で縄文時代の石鏃を表採以来、烏帽子岳から八天岳に至る山腹を中心に遺跡の踏査を開始し、以後、踏査範囲は徐々に広がり、松浦市、伊万里市、川棚町等に及んだ。柚木町里美郷の焼山池畔で、多量の先土器時代、縄文時代の遺物（石器、土器片）発見を契機として同好会を発足させた経緯、活動の状況は、10年史に來山先生が詳しくまとめておられるので、参考にさせていただきたい。

昭和41年の第1回高専祭には2つの教室を使い、会員収集の資料、初代校長大脇策一先生所蔵の考古資料、地元地区住民の収集資料等1000余点を展示、解説し、多くの参観者を集めた。栄木孝蔵氏（4M）、小山祐一氏（7C）、岩本博幸氏（8C）と順調に会長は引き継がれ、昭和45年には待望の会誌「火のくに」が発行された。第3回高専祭（昭和47年）のプログラムには本会の記載があるものの、20年史には本会の紹介文がなく、会誌発行後、継承者が現れずに散会したものと考えている。

高専にあっては、ユニークな同好会であり、長続きして欲しかったが残念でならない。

現在、鉄の街八幡で、40年近く継続している考古歴史のサロン「枝光古代史会」を主宰している。

120分の4人

1E 小野(今永) 啓子

ある日のこと、4人の女子学生全員が一人の実家に集合致しました。そこ柚木には、仮の男子寮がありました。実家通学と女子学生を対象外にした木造平屋建ては、結核（昔は死に至る不治の病）療養所だったと噂されていました。ランチの後で、男子寮を探索（決して覗きではなくて）することに決まりました。裏には小川が流れており、男子が見つかるのが恥ずかしかった私たち乙女は、裏手から攻めることにしました。小川に足を踏み出して直ぐに、私だけが流れに足をとられてずぶぬれに。探索は断念。昼間からお風呂に入って、優雅な休日を笑って（笑われて）過ごしたのでした。私は今でも勇敢さで一番手になったと信じていますが、言い出しっぺの罰

当たりという話になっているのが残念です。そういえば、校舎は夜間高校を夕方まで拝借したものでしたね。あれから半世紀、古希の祝いも済みました。

「九州で1校だけの高専ができるって。運試しに受けてみるね」母と女先生に勧められました。父は病気や餓死でほぼ全滅したビルマ（現ミャンマー）戦線の生き残り。戦争未亡人になるかも知れなかった母は、時々私だけにこっそり言っていました。「息子たちはどうでもなる。一人娘は将来のために先生にならば」本番に強い？私は高専合格！「国立は授業料が安か。戦時中の高専は兵役免除やったかね」意味不明、ゲンキンで現実的な母の変心。死線を経験した父は「高校に行ってから好きな道を探せば良かろうもん」「中学としても辞退者は出したくないですわねえ」てな先生方の意見もあったかしらん。周りの「新聞を見たよ。高専スゴカア」そんな声でお調子者の私は決断した気がします。

入学式以来、女子はいつも一緒。自分達でデザインした制服を着用する頃は、男子の坊主頭も青年らしく伸びていましたっけ。クラブ活動や家庭環境の変化で、私たちの毎日は各々変わって行きました。弘子ちゃん、ミエちゃん、由紀子ちゃんは今も元気です。創立古希の15年後は、一緒に祝いたいものです。

佐世保高専同窓会 50周年記念号に寄せて

5M 林田 国松

去る2017年11月4日、久しぶりに母校を訪ね、佐世保高専同窓会50周年記念講演会に出席させて頂いた。同窓会役員の方々のお膳立てに依る、高田明氏の講演を聴いた。氏は(株)ジャパネットたかたの創始者で、今ではJリーグのサッカーチーム「V・ファールン長崎」をJ1昇格へと導いた立役者として時の人になった辣腕経営者。本人を一目観てビックリ、とにかく若い！見た瞬間「俺よりずいぶん若い」と感じたが、実は私より年上で来年は古希を迎えるとのこと。でも「あと50年は生きるつもりで頑張っている」と言っただけではない。だから演題は「夢持ち続けて日々精進」。「年齢を言い訳にするな！」との

強烈なメッセージとエネルギーを貰った。

その2週間後の11月26日には草野仁さんの講演を聴く機会にも恵まれた。「世界ふしぎ発見」の司会者、氏が島原市出身とのことで島原文化会館での講演会でした。満州生まれで幼少期を島原で過ごし、東大卒業後はNHKアナウンサーになった氏の人生は順風満帆だと想像していたが「もの凄い努力家である」ことを教えられた。

73歳の草野さん、その行動力が凄い。毎週の番組の準備を怠らず、心身を鍛え、多くの講演会もこなし、さらには新しいことにもチャレンジを続ける。「年齢は行動の障害にならないし、してはいけない！」と言い切ってしまう。だから当日の演題は「いつもチャレンジ精神で」でした。

話を同窓会50周年記念式典に戻すと、現校長東田先生と前校長中尾先生が語っておられた「高専魂」についてのお話を大変興味深く聞きました。私もこの魂を受け継いでいるような気がして納得。丁度10月に新しい会社を立ちあげた直後だったので、講演者や校長先生方のお話から「生涯現役に挑戦し続ける勇気と自信」を頂きました。古希に近づいても尚、新規事業立ち上げにチャレンジするのは「佐世保高専魂」の遺伝子かも？

「佐世保高専魂」に感謝、感謝、感謝です。

JA6YEL こちら佐世保高専無線部です。

5E 朝永 憲法

JA6 ヤングエレガントレディのコールサインは、佐世保高専無線部です。

無線部には、1期生の秀島さん、小嶋さん、玉島さん、柴原さん、権藤さん他多くの先輩や同期の嘉村君など賑やかなクラブでした。

入部後、5月の連休に大村の野岳湖でキャンプを行いました。バーベキューやボート遊びなど楽しい記憶よりも、5月といえとても寒いなかで皆凍えながらキャンプをした記憶の方が鮮明に残っています。とても面倒見の良い先輩方に囲まれて、無線部活動を過ごしました。

何十年たっても、クラブの独特のコールサインは

忘れません。「ヤングエレガントレディ」なんと響きの良いコールサインでしょう。また、JA6 は九州地区6でAは本当に初期の番号になります。

先日、高専祭で無線部を見学しましたが、引き続きこのコールサインが使われているのを見て懐かしく思いました。今後とも、JA6YELを継続してください。

佐世保高専青少年赤十字同好会 (JRC)

5E 朝永 憲法

今はもう無くなってしまいましたが、佐世保高専に青少年赤十字同好会がありました。JRC(Junior Red Cross)です。高専だからといって、日本無線のJRCとは違います。4Mの碓さんを団長に、下野さん、4E大島さん5C小田君、6E吉村君、古田君、7C久我君など最盛期には20人近くのメンバーが集っていました。そう、化学科のモナリザと呼ばれた女性団員も居ました。(申し訳ない、健忘症で名前を忘れた)

顧問は、佐世保南高でもJRCの顧問をされていた、英語の高野先生にお願いしました。佐世保市内の各高校のJRCのメンバーと交流を持つとともに、長崎市の高校のJRCメンバーとも交流を持つなど、広域の活発な活動を行っていました。

赤十字の思想のもと、各種奉仕活動に積極的に参加していました。部室は4階にありました。えっ、高専は3階建てでは？と思われそうですが、本館の屋上に出るところに小さい部室をもらって活動をしていました。

セピア色の青春譚

5C(1966~1971) 水本 信明

●十五の春 沖新校舎を観る 硬い、冷たいのんびりした故郷の学校とは雲泥の差 えらい所に来た初めて履いた革靴の窮屈さ 動揺と負けん気が交錯する案の定の悲鳴 丁寧とは言えぬ授業に ついていけない

▶西雲寮 名物は鯨の竜田揚げ 歯間に詰まる本の文通欄で得た手紙を広げる奴 理由なく喧嘩する奴 ラジオ分解に精出す奴 二段ベッドがすすり泣きできむ田舎度の比較で賑わう部屋 夢・恋・友・生を本音で喋る

●おもろい先生に学ぶ 池田先生は高専の壁

単位揃えに厳しい森先生 走る平田先生、柔の友寄先生 息抜きは校歌の高橋先生、魅惑の英会話・オーレン先生 追試は熱力・浜野先生 それより難解な物理・吉田直先生

▶無機は理屈好きの富永先生、人気の山邊先生 現場感覚の有機・安武先生 遠くて近い化工・永末先生 卒研と就活でお世話になった分析・中谷先生、和田先生 学生運動や技術革新の波 寄り添って一回生を世に送る

●高専祭・文化祭 工化科が団結の体育祭優勝 みこしを担いで町に出たり 分子模型を市民に説明したり 木村・小池・古賀・塚本・吉岡の演奏に 女子高生が絶叫 先輩方は♪君といつまでも 美声の西は♪雨のバラード

▶水泳大会 団体リレー参加も途中でギブアップ 原因は練習不足・喫煙等 繋いだ仲間に顔向けできない 挽回できたのは駅伝大会 東浜からの坂のある約4km走へこたれず繋ぐ 一つになる達成感は格別 腑に落ちる

●退寮後は准看護師の姉と 転々の間借生活 野菜炒めやカレー・みそ汁を作る ご飯を腹一杯食べる たまのおかずは 戸尾市場の総菜、おぼちゃんの焼そば 美味のおやつは 姉の持ち帰る九十九島せんべいの破片

▶授業料八百円、奨学金二千円位 バイトに励む SSK社員の息女や銀行員の息子に 週数回の家庭教師 新聞配達は原付で 雨や雪でよく転び 月七千円位もらう 午後一の授業 睡眠不足だと言い訳 よだれ垂らし熟睡

●基地佐世保の街 平瀬橋で騒乱 共感できず 米兵に出会うと正直怖い が彼らも出兵は怖かったのか 嫌だ戦争なくそう原水爆 熱論は 四ヶ町入口の酒屋「さき」 ホットする酒は東浜町 故郷の中学同級生は籠船の船員

▶沖新に自動車教習所 通う仲間見て指をくわえる 学生食堂 あったかいおかずと持参の冷ご飯 至福のとき デートや初日の出・凧揚げは弓張岳 登山は烏帽子岳 一休のうどんが35円 千成食堂のカレーが70円の時代



5C 卒業写真(1971年3月)

15の春から半世紀

5C 古賀 光信

52年前の3月雨の夜、一通の電報「佐世保高専補欠合格」

既に武雄高校への進路を決めていたが、北方中学の担任の先生へ相談すると「願ってもない高専へ行くべきだ！」と即答で返ってきた。両親も高専の方を勧めた。3兄弟の末っ子、兄二人は工業高校を出ており、両親の気持ちは痛いほど分かった。

かくして昭和41年4月、工業化学科1期生として佐世保高専の門をくぐった。

一学期は北方駅から汽車通学。まだSLが走っている時代、トンネルの手前で慌てて窓を閉める。それでも車内には煙が充満することがあったが、初めての汽車通学は意外と楽しかった。長髪に高専の徽章帽、高専ボタンの学生服、黒の鞆に革靴どれも新鮮で、周りの丸坊主高校生と比べ都会的な雰囲気です少し誇らしかった。しかし授業が始まると、まるでついていけない。中学時代少しは自信があったのに。周りの連中がとても賢く見える、あせった。

二学期から寮に入った。親には勉強に専念したいと嘘をついた。西雲寮は満室だったので構内にある仮寮である。工事現場の長屋みたいなものでお世辞にもいいものではないが、千成食堂に近く便利であった。2年生になると新しい棟が完成し、めでたく西雲寮に引っ越し、野球部で汗をかき、まさに青春を謳歌した。

化学の実験は楽しかったが、他の科目にはさほど力が入らず何となく2年間が過ぎ3年生となり、下宿生活が魅力的に感じて藤原町の中山家へお世話になった。当初は4年生の剣道部中尾先輩と一緒に生活し、中尾先輩卒業後は同じクラスの松尾君と同居した。中山家はとても厳格であるが、アットホームで食事家の皆さんと一緒に取った。卒業するまでさほど悪い遊びも覚え、無事卒業できたのは中山家の人々のお陰でもある。

以来、40年に渡り宇部興産に勤務、山口～大阪(最も長い)～東京～大阪と渡り歩き定年を迎えた。今

は縁あって兵庫県豊岡市で第2の仕事を楽しんでいる。自然と歴史ある町、温泉と魚(特に蟹)の美味しい町、豊岡は一旦絶滅したコウノトリの繁殖に成功し、今では近所の田んぼで餌を啄むコウノトリを頻繁に見かけるようになった。

振り返って見ると、自分という人間を育ててくれた自然や町、出会った人々、仲間、先生、特に高専の5年間は、人としての成長を最も支えてくれたものがギュッと詰まっていたと思う。高専あっての今の自分あり。高専に感謝しつつ、残された人生を楽しく送りたいと思っている。

佐世保高専五回生同窓会

5C 眞崎 重利

工業化学科1期(5C)の同窓会は5年に一度佐世保で、機械、電気、化学の5期3科合同関東の同窓会は毎年12月に関東のどこかで行われる。私は殆ど参加している。同窓会は集まって、みんなの顔を見て、話をし、飲んで、寝て、翌朝解散するだけである。でも参加するだけでほっとする。

若い時は、あいつ凄、出世している、60歳になったらさっさと辞めて佐世保に帰り、悠々自適か、羨ましいと、その時々で感じることは違っても、同期のみんなの顔をみると、昭和41年に入学した頃を、私の原点を思い出させてくれます。参加の度に元気を貰ってきました。

忘れられない、びっくりしたこともありました。今から約30年前(1990年頃)機械、電気、化学で初めての関東の3科合同同窓会が川崎のJR国道駅近くでありました。電気のAさんがちょっとだけ遅れてきて、開口一番、俺たった今会社辞めてきた。そのあつけらかんとした態度に驚きました。15の時は何も持っていなかった、本当の裸だった。意に反したことがあれば元に戻れば良いではないかと、暗に教えられました。この衝撃は私には大きかった。

65歳の工業化学科同窓会には女房も一緒に参加させて貰いました。私が元気にこの年まで過ごせたのも、その一つにはたった一日ですが、入学した頃

を思い出し、元気付けられたこの会、この雰囲気を知って欲しかったからです。

今月末で46年9ヶ月の会社生活を卒業します。仕事の都合でこの5年間関東の同窓会に参加してませんが、来年の関東同窓会を楽しみにしています。また来年9月の化学関西同窓会の誘いもありました。これからの今までとは違う人生に不安も一杯ありますが、年に一度か二度原点に戻り、第三の人生を楽しんで生きたい。そう思っています。

私と高専

7C 馬場 九洲夫

私は幼少の頃から科学が好きで、小学4年の頃からは化学に強い関心を持つようになっていた。草花の色が酸やアルカリによって変わることの不思議から始まり、ペンシルロケットの火薬作り、フェノール樹脂、尿素樹脂、等々。

ニトログリセリンは危険と言うのでニトロセルロースでセルロイドを作ったりしていた。銅アンモニアレーヨン(ベンベルグ)、ビスコースレーヨンと次から次へと色んな物へ挑戦していった。こんなことだったので大学へ行って応用化学を勉強したいと考えていた。中学3年の進路を決める時になって、父より「お前を大学にやる余裕は無い」と言われ、高専というあまり良く分らない学校への進路変更となった。

どんな学校だろうかと不安を抱いて高専へ入学して、これは良い所へ来たと思った。自分の好きな勉強ができる。嫌いな科目は赤点さえ取らなかつたら良い。何か自分にピタシの学校のように思えた。早速理化学部に入り、自分の好きな実験をして楽しんだ。特に反応性染料の合成には三年ほどの時間をつぎ込んだ。化学の授業は何でも楽しかった。ただ一つ、どうしても好きに成れなかつたのが珪酸塩工学(セラミック)であった。

昭和48年、卒業と同時に旭化成工業に入り約3年の会社勤めの後、結婚の為に有田へ来て42年に成ろうとしています。有田と言えば焼き物、どうした巡りあわせか学生時代にどうしても好きに成れなかつ

たセラミックの世界です。

しかし、私には化学しか人に勝てそうなものが有りません。そこで考えを変えました。「そうだ焼き物を化学で考えよう」ここから焼き物が楽しく成りました。そして、色んなアイデアが湧いて来ました。暗中に摸索の毎日でしたが、アツという間に42年が過ぎました。私の仕事はエンドレスです。これからどんな出合いが有るのかを楽しみに日々精進しております。(馬場氏は2012年第44回日展特選を受賞されました)

だれが誰だ♪

8E 森田 仁

平成21年正月2日に佐世保で開催した「S44年度入学者対象3学科合同同窓会」にて、一夜の青春に浸った当時の体験文を「同窓会50周年特別会報」向けに以下、再編集しました。

午後3時から同窓会は始まっていた。俺が最後の受付けだった。受付で卒業アルバムの中の個人写真に名前が記された透明名札を渡され、それを首にぶら下げての入場。後にこれが大変役立つことを思い知らされようとは……。会場には3つの丸テーブルが置かれ、入学学科別に参加者は座っていたが、会場の第一印象はまるでどこかの老人会の寄せ集めだった。

目指す電気科テーブルの空いている椅子に座れば周りには見知らぬ顔ばかり……。左隣には白髪頭の釘本が、その隣は「森田あ〜」と声を掛け続ける誰かが……。一方の右隣は部外者が見れば誰もが恩師と見間違うであろう、これまた頭真っ白の江口つつあん。それから順に古川、宗俊、富田、川下、クラス移籍した河部、秋則と続いて、先ほど誰だか判らなかつた正面からは頭髪が見えない眼鏡をかけた丸顔の彼と目が合う。その時不安げな俺を誰かが救ってくれた。「小杉ぞお」と。遠めに覗く名札がその事実を知らせてくれる。俺が改めて茂巳と吉永の死を報告する。

司会者に対し皆が「夏っちゃん、準備をありがとう」と声を掛けている。宴会の前に各科別と3科合同での記念撮影があり電気科が一番目。その前列中央に腰掛けるのは皆の付度で、一見恩師の江口つつ

あん。次の機械科は参加者が少なく1列のみで、最後の化学科は電気科と同じく2列で撮影。

いよいよ宴会が始まった。外見は変わっても皆声だけは変わらない。機械の席からは聞き覚えのある声がある。酒を飲み込む速さとその量、そして体に似合わぬ大声は当時のままだ。「害のあるアルコールを子孫に残すのは罪だ」と杯を重ねている。名札で確認しなくても彼は余悟だ。

30分延長の宴会も終わりに近づき二度目の記念撮影。今度は偏差値が低い順ということで化学が先となったのだが、「実力偏差値はココ」と突然指名があり俺も前列に座らされる。余悟も俺の隣に座る。続く機械は他クラス有志で人数膨らまして撮影。最後の電気からは排除されるかと不安だったが、仲間に入れてもらえての1枚。そして3科合同撮影で同窓会は全員笑顔にて終了！

2次会の割烹店では化学の“事件記憶王”中村を再認識させられる。当時の記憶が戻れば電気の(旧姓)西山に電話しない手はない。既に河部が奥さんに代わらせたようだ。もう止められない。次の順を楽しみにしている俺がいる。中村も「早よう代われ代われ」とせがんでいる……。

次は3次会だ。まだまだ55歳オジサン達の青春の夜は続くぞお～～。

「九機会」の仲間へ

9M 秀島 保男

私は昭和50年(1975年)に九期生として機械工学科を卒業しました。その頃、機械工学科は2クラスありましたので、多くの仲間にも恵まれて思春期を有意義に過ごすことが出来たように思います。卒業と同時に多くが県外へ就職しましたので、全国に散り々となりましたが、私達は心の中でずっと繋がっています。「九機会」とは昭和50年機械工学科卒業生の同窓会の名前です。皆で決めたはずの名前ですが、40年以上も経つとその経緯さえもよく思い出せません。

卒業とともにそれぞれ進む道が違うのは世の常で、予期せぬ人生を歩んだ人もいますが、その道一筋の人も

います。それでも40年以上に渡りこの仲間との交流は脈々と続いています。定期的開催される同窓会もさることながら、若いころはハイキング、近年はゴルフや新年会・懇親会などが楽しい交流の場となっています。私は関東に住んでいるため、誰かが仕事で上京するとすぐに集まりお酒を飲み交わす、逆に佐世保に帰省するとまた集まりお酒を飲み交わすといった具合です。高専時代・仕事・家庭・故郷・趣味・政治・病気など話は尽きないし、それぞれの人生が実に興味深い。

友は人生を彩るといいますが、その通りだと思う。実に不思議だが、すばらしい仲間にも恵まれている。同郷で思春期の5年間を共に過ごしたことが、こんなにも私の人生に恵みをもたらすとは思ってもよらなかった。自治会・少年野球・会社の仲間など他にも仲間はいるが、やはり「九機会」である。

子育てが終わり、仕事も第一線から退きつつある今、そろそろ人生を楽しむかと思えたときに、今更ながら仲間への感謝の気持ちが湧いてくる。卒業後40数年が経ち、容姿がずいぶん変わった人もいるし、長崎弁はなかなか出なくなりましたが、仲間を自慢している自分がある。



九機会 30周年同窓会

バドミントン部の思い出

10E 浜田 義秀

十一月に開催された佐高専同窓会50周年記念式典に出席するため久しぶりに母校を訪れました。その折50周年記念事業として建設された八角堂に入り学校の歴史、各クラブの紹介パネルを読み進んでいくと、ありました自分の名前が！。頭の中が一挙に四〇数年前に戻り楽しかった青春の思い出がよみがえってきました。

中学時代はブラスバンド部でしたが高専ではスポ

ーツをやりたくて最初テニス部に入部し、1年間続けましたが中学からテニスが続けてる同級生にはとても追いつけない挫折感から退部しました。しばらくぶらぶらしてる時10Cの武田君と知り合い彼がいるバドミントン部へ入部しました。当時はバドミントン愛好会で8期の辻先輩方が中心になり立上げて間もない頃でした。愛好会でしたので体育館が使えず。屋外にネットを張って練習していましたが風でシャトルが翻弄されて大変でした。また経験者がいなく、専門誌を読みながら基礎知識や練習方法を習得していきました。一番最初の対外試合は青雲寮の横に職業訓練校があり(現在は移転?)そこのクラブと試合をしましたが、結果は全敗で皆悔しい思いをしました。でもこれがきっかけで、自分たちに何が足りないか、どうすれば強くなれるか考え、目標を持って練習にも励むようになったことを思い出します。

先輩方や同級生、後輩達の努力で愛好会から同好会、そして念願の部に昇格した時は本当に嬉しくて感動しました。卒業してから四十年、学んだ事も役に立ちましたが丈夫な体と根性はクラブ活動のおかげかと思っています。また何よりの財産は部活で一緒に汗を流した先輩方、同級生、後輩達との縁です。1年前にはバドミントン部OB仲間が還暦祝いをしてくれた時はとても嬉しく感動しました。一生大事にしたい縁です。

最後に佐世保高専および同窓会の今後益々の発展、そしてバドミントン部後輩たちの活躍を祈願して拙い寄稿文を締めくくります。

青柳先輩の思い出

14M 吉川 忠博

私が佐世保高専に入学したのは長崎空港開港、新幹線博多開業の昭和50年です。入学してラグビー部に入部しました。

ラグビー部で過ごした5年間は毎日厳しい練習でしたが、その中から計り知れないほどの人生の宝を得ました。これは、顧問の池田稔先生を始めすばらしき先輩、同級生、後輩のおかげです。

すばらしき先輩の中で、1回生の青柳先輩の思い出

を紹介します。青柳先輩は時々グラウンドへ足を運んで下さって練習の指導をしていただきました。私のポジションが1番(左プロップ)というスクラムの最前列で、青柳先輩と同じポジションでしたので、私は特に多く指導していただきました。

忘れられないのは3年生の時、全国大会初出場をかけた都城との一戦、久留米のグラウンドで試合開始前「いいか、とにかくスクラムをしっかり組む事だ。それがお前の役目だ。」と私に特別に喝を入れてくださいました。試合は見事勝利して佐世保高専ラグビー部全国大会初出場を手にする事が出来ました。

そしてノーサード後、「よし、よく頑張った全国大会でも頑張つてこい。」と激励をいただきました。

1回生の頃は、高専大会の制度も整わず、近隣のチームと試合をしながら切磋琢磨していた事は池田先生から度々聞いていました。先輩が私たちに全国大会の夢を託された思いを強く感じました。

初めての全国大会、1回戦は勝利したものの、準決勝で優勝した函館高専と対戦、全国大会の厳しさを思い知らされる試合でベスト4でした。

翌年は部員一同一丸となって再び全国大会に出場、見事全国大会優勝。

5年生となった年は全国大会が第10回の記念大会となり、前回優勝で九州大会なしで全国大会に出場しました。そして決勝で久留米と対戦しましたが惜しくも敗れ準優勝で高専を卒業しました。

卒業後は、正月に母校のグラウンドにOBと現役が集まり、試合をするのが恒例となっていましたので、帰省した正月には参加しました。

入社4年目の正月、母校のグラウンドに行き試合に参加しました。この時は青柳先輩や多数のOBが参加されて、大変にぎやかな新年を迎える事が出来ました。

その年の2月に私は急遽サウジアラビア勤務となり1年2カ月ほど赴任しました。サウジアラビア勤務中、突然兄(9回生)から「青柳先輩が急に亡くなられた」と知らせが来ました。兄は池田先生や他の先輩方と共に駆け付け最期のお見送りをしました。

帰国してから、池田先生にお話を伺うと、青柳先輩

は亡くなる前日もグラウンドに見えられて、後輩のスクラム練習の指導をなさったそうです。ラグビーで繋がれた後輩を常に思い、温かく応援して下さいました。青柳先輩には感謝の気持ちで一杯です。ラグビーで繋がれた魂は人生の宝物として生涯大切にしてください。

『新聞部での活動の思い出』

15C 椿崎 仙市

関係者の皆様、佐世保高専同窓会 50 周年おめでとうございます。

私は、昭和 51~56 年度に在籍しており、クラブは新聞部でした。新聞部は昭和 38 年 2 月に発足、同 11 月に「佐世保高専新聞」が創刊されました。

私は、1 年の下期（昭和 51 年）に、顧問であった川村先生（社会）からの新聞部部員募集のお話（授業中）に熱い思いを感じ、同じ学科で仲のよかった A さんと 2 人で入部しました。当時、部員は 4 年生 2 人だけで、既に存亡の危機でしたが、川村先生の熱心な勧誘で、他の学年からも数人が入部したようです。

顧問の川村先生（社会）、佐々木先生（国語）、佐野先生（英語）と先輩方から、取材用カメラの使い方、写真現像方法、取材方法、原稿の書き方、読んでもらえる見出しの付け方、紙面配置、印刷会社との交渉、広告掲載の交渉、校閲など丁寧に教えていただきました。写真現像は失敗が多かったのですが、その後写真屋さんに現像を依頼することになりましたが、他のスキルは、今でも論文執筆やプレゼン資料作成に十分生かしていると実感しています。当時原稿は手書きで、書いていただいた原稿の文字の解読ができず、何度も教官室を訪問したこともありました。（先生が達筆なのか個性的なのか、当時は判断できず。）

また、夏・冬の高専大会には、取材で同行させていただく機会もあり、昭和 54 年 1 月、ラグビー部が全国高専大会（尼崎）優勝の際には、感動を共有させていただきました。

なお、在部中、先輩方の念願であった第 1 号（創刊号）～第 20 号縮刷版・跳-を昭和 52 年に、第 21～第 40 号縮刷版・未来-を昭和 53 年に発行し、佐世保高専の歴

史を伝える一助になったことは非常に嬉しいことです。

新聞部は、一時休部を経て、誌名が「West Wind」となり情報誌として復活した話を聞いていましたが、平成 22 年度を最後に廃部となってしまったのは、非常に残念なことです。これも時代の流れでしょうが、今後 Web 上で復活することを、期待しています。

東京支部総会に参加して

18M 大久保 篤

平成 29 年 6 月 10 日に東京支部総会が行われ、恥ずかしながら卒業後 33 年経って、初めて同窓会と呼ばれるものに参加しました。初めて？会う方ばかりで、同級生もほとんどいないなか、来賓、先生方含めて 79 名の方々が参加されていました。私も 18 期卒の 54 歳なので、おじさんの範疇かと思えば、席は後ろの方で、年下がほとんどいないという事態に直面しました。良く考えれば、私もそうだったという反省です。

でも、先輩方々のお元気なこと、また余興では学生時代の昔話を今のこのように話される記憶力、高専パワーを実感することができました。

仕事上、お客さんとの付き合いも多く、最近他県も含め高専卒の方々と会う機会が増えてきました。同じ学校の卒業生とは、いろんな情報交換もできますし、仕事の紹介なども気軽に出来る所もあり、非常に重宝しています。こんなこともあって、皆さんに一言、やっぱり同窓生は大事にしましょう。また、出来る限りで同窓会など、同窓生と出会う場所には参加しましょう。先輩から面倒な説教をされることもなく、学生時代よりも親しく話せるような気がします。

是非、機会が有ったら皆さんも参加されてください。楽しいですよ。

「佐世保高専 万歳！」

18E 安永 孝徳

この度は、佐世保高専同窓会 50 周年誠におめでとうございます。私事ではありますが僭越ながら寄稿させていただきます。

私の所属する会社は約 9500 人の社員が居るM社

昇降機・空調機の保守を主とするエンジニアリング会社です。その中で高専卒は約 1500 人と全体の 15%を占めるという高専卒がある意味異常に多い会社です。管理・監督者は基より経営幹部まで高専卒が要職を務めており、会議の中で鋭い事を発言する方は殆どの方はどこかの高専卒という状況です。

よって会社の懇親会では自然と出身高専の自慢を行い、他高専よりも出身高専の優れている事象を言い合うことが良くあります。(例えば全国高専大会やロボコンはどこが優勝したとか…)

勿論、私も佐世保高専ラグビー部室が過去TV番組「ビフォー・アフター」で放送されたことを自慢しています(笑)

その中で同窓会の話となり、近年各校活発に活動されている事を耳にしておりました。

が、会社の皆さんは現役なのであまり積極的に参加されていない実態もありました。

理由は面倒くさい。時間が無い。知っている人が居ない等。確かに納得です。

話は変わりますが私が 50 歳の年、卒業後 30 年という事もあり私が幹事を買って出て 18E の同窓会を行い恩師も来て頂き皆で大変盛り上がりました。

自分の人生の棚卸を一度やってみよう！と考え学生時代の同級生に出来るだけ参加頂き、逢えば懐かしい話で大盛り上がり。会社の飲み会とクオリティが全然違います。

そもそも青春時代、佐世保高専を受験し、西雲寮で生活し、部活と実験に明け暮れそれも 5 年間一緒の仲間とは「絆」が違います。卒業して生活・会社環境等全てがバラバラになりましたが「志」は皆さん一緒でした。そして今年の 6 月佐世保高専同窓会東京支部総会があり同じ会社の先輩と出席させて頂きました。私は営業職というもあり「総合司会」を命ぜられ、しどろもどろでしたが何とか終わる事が出来ました。一桁卒業生の方が殆どでしたが年が違えど「志」は一緒でした。どうでしょう。同窓会に参加し「佐世保高専 万歳！」をご一緒にやりませんか？まさに「快感」ですよ！出席しなきゃわかりません(笑)

「佐世保高専への入学を両親に感謝」

20M 北口 功幸

1980 年中学 3 年の夏、両親との卒業後の進路の話をした事を思い出します。「普通高校に行って、大学は英文科に行きたい」(私)、「普通高校には行けるやろうけど、その後、国立の大学へ行ければ良いが、私立の大学に通わせるお金はない。」「高専なら国立で授業料が安く、直ぐに就職出来る。」(母より)

「佐世保にも高専はあるが、有明の高専には建築があり、就職に有利なのでは？」(建設省勤務の父より)結果として、1981 年佐世保高専機械工学科に入学し、剣道部は根性なく 3 年で辞め、続けて退寮、学生会長を務めたお陰で首の皮一枚繋がり、卒業する事が出来ました。卒業時は、楽しい時間を共に過ごした友人に感謝の気持ちだけでした。

卒業後、数社サラリーマン生活を経験し、1996 年亀山電機を一人で創立しました。

サラリーマンの 10 年間は、学生時代の不勉強故に、技術を身に着ける事に必死でした。また、「周りには技術的に負けない」という根性が学生時代に根付いていたと感じました。

2008 年頃誘いを受け佐世保高専同窓会活動を始め、2013 年 11 月より 2 年間、同窓会会長を務めさせて頂きました。この頃から佐世保高専の先輩方との付き合いの輪が広がり、先輩方の歴史の上に学校が存続し、先輩方の努力のお陰で一般社会での高専の高い価値が評価されている事を痛感し、卒業時には、同級生にしか感謝の気持ちはありませんでしたが、佐世保高専・先生方・先輩方に感謝する事が多くなりました。

また、2015 年愚息は運よく佐世保高専機械工学科に入学しました。学生時代の父の素行は知らない筈ですが、「血は争えない」の言葉を痛感する日々です。私の両親も思ったであろう、何事も起こさず無事な卒業を祈るばかりです。また、更に高専の先生方に対する感謝の気持ちが強くなるばかりです。

そして、中学校時代の進路の話から約 40 年弱経った現在、今は亡き両親の言葉を素直に受け入れた結果として、社員約 100 名の亀山電機のメンバーと共

に制御分野で少なからずとも社会貢献させて頂いている事に、心の底から両親に感謝の日々です。

全国高専大会（陸上競技）の応援に際して

29S 眞弓 康弘

同窓会設立 50 周年、おめでとうございます。

29S の眞弓と申します。

学生時代は陸上競技部に所属しておりました。

去る 8 月 27 日、長野県松本市で開催された第 52 回全国高等専門学校体育大会陸上競技の応援に行ってきました。

地域的なものなのか、競技開始前は涼しい感じ（少々寒いくらい）でしたが、日中は日差しも強くなり気温も上がってきました。

そのような中、佐世保は女子学生の活躍がめざましく、総合優勝となりました。

おめでとう！！

男子の方は他高専のレベルが非常に高く残念な結果ではありましたが、男女ともに最後のリレーまで『佐世保高専魂』を見ることができ、学生の皆さんから元気をもらいました。

陸上競技部のユニフォームは臙脂のシャツに白のパンツと決して派手なものではありませんが、その立ちの選手がグラウンドで躍動している姿を見ると、卒業して 20 年以上経った今でも興奮してしまいます。

女子は今回、全国大会での総合優勝を達成することができました。

次は男子の総合優勝を期待しています。

男子の総合優勝は、私が現役の時もあと一步のところまで手が届かず、すでに 20 年以上も遠ざかっています。いつか全国大会で総合優勝をして、顧問の吉塚先生を胴上げすることを一 OB として楽しみにしています。

『理系女子のランチ会』

40S 神村(佐藤) 真衣子

卒業して 10 年以上が過ぎました。

高専時代を振り返ると、寮生活、部活動、卒研、ロボコン、学生会活動どれも充実したいい思い出です。

高専の特色の一つは、男性が多いことです。私のクラスは 8 割が男子でした。高専に限らず理系の道に進むと男性社会に飛び込む形となります。私自身、そのような環境が卒業後大学、就職先と続きました。

就職後、私は佐世保高専卒の女性数名と、女子会を楽しんでいます。メンバーの出身学科はばらばらですが皆、理系の職場に就いており、普段男性社員に囲まれた環境で働いています。理系女性の働く環境は「同期に女性が少ない」「後輩の女性が入ってこない」「男性上司」「年輩男性社員は職人気質」など似ている部分があります。職場では同じ境遇の人が少なく共感を得難い問題も、高専卒の女性同士で集まると共通の話題となります。

女子会らしく、インスタ映えするおしゃれなランチを楽しみながら、ぺちやくちやおしゃべり。しかし、理系用語も飛び交う会話は、ランチの終了時間が迫るとすんなり収束します。テキパキと料金を計算し、支払い終わると「じゃあね」とあっさり別れる。こんなところにさばさばした理系女子ならではの心地よさを感じています。

女子会も間もなく 10 年でしょうか。男性が多い職場ならではの悩みを、この女子会でたくさん展開しました。会話は高専卒の似た者同士の理系女子によって論理的にまとめられ整理されてきた気がします。

私は退職結婚して女子会に子供を連れて行くことも増えました。今では育児の息抜きの場所にもなっています。

2016 年のロボコン全国大会に佐世保高専が出場した際には、当時 2 歳の娘と一緒に観戦に行きました。将来、娘がロボット好きの理系になる姿も想像しつつ、そのころには時代が変わり、理系の女性が増えているかもしれないと思ったりしています。

人生のスタート

42S 富島 昂

「君は高専に行った方がいい」

中学三年の進路相談の時、担任の先生に希望校を伝えるとそう言われた。

当時の私は「高専に行ったらあとでなんにでもなれる」という都市伝説みたいなものを信じており、特にやりたいこともなかったのでなんとなく高専に行くことを決めた。

高専時代は個性豊かな友達と楽しく過ごすことができた。

卒業の年、就職先も卒研室の先生の勧めでなんとなく日本精工に決めた。以来、10年程日本精工で働かせていただいた。私の力では到底入る事ができない素晴らしい会社なので、高専の先輩たちへはとても感謝している。

最初は辛かった仕事も数年経つと慣れてくるもので、そこそこ仕事を覚えて、そこそこ給料をもらえて、結婚して、子供ができて、そこそこの暮らしができていた。なんとなく入った日本精工での経験は本当に自分のためになったし、たくさんの素晴らしい人たちとも出会えたので後悔はない。

ただ、このままなんとなく人生を進んでいくことに違和感があった。

28歳の時、先輩が「28歳からのリアル」という1冊の本を貸してくれた。この本に出会ってから自分の人生について考える様になった。

そして、「30歳までに長崎で働く」と初めて自分で決めた。

高専時代の友達に高専のOBが経営している亀山電機の事を教えてもらった。亀山電機の事を調べ、連絡をとり、北口社長と話す時間を作っていただけの事になった。

北口社長は私がこれまで会ったことのない厳格かつ自分の意志をしっかりと持っている人だと感じ、この人の下で働きたいと思い、亀山電機で働く事を決めた。2017年の春に私は30歳となり、亀山電機で働き出した。生涯年収は1億円ぐらい下がったかもしれない。しかし、それ以上に今は自分の人生を歩んでいるという実感が湧いている。

この先の人生がどうなるかわからないが、自分の頭で考え自分で選択し、自分の人生に責任をもって歩んでいきたいと思う。

～ハンドボール部での5年間～

45M 三原 涼

私は第45回生として佐世保工業高等専門学校へ入学した。県内でも高水準の偏差値を誇る学校での5年間。入学式当日は期待と不安が入り交じった複雑な気持ちで正門をくぐったのを今でも鮮明に覚えている。

ここからは、学校生活の中での青春の一つ、クラブ活動に話を移す。

私は5年間という一般の高校よりも長いクラブ活動期間を、ハンドボール部員として謳歌することを決めた。理由は、当初ハンドボール部は創部間もなかったため、他校との勝敗を競うだけでなく、ハンドボール部を立ち上げていくという楽しみも感じることができると考えたためである。

創部間もないということもあり、ある程度の苦難は覚悟していた。しかし実際に入部してみると、私が想像していた以上の苦難が待ち構えていた。

”練習場所がない!!”

ここから5年間のクラブ活動が始まった。決まった練習場所がなく、グラウンドの隅やテニスコート横の壁打ち？エリアで細々と練習をしていた。他校との試合では、勝った記憶はほとんどない。それでも毎日が充実していた。その中でも特に印象に残っているのは、練習や試合ではなく”練習場所を一から作った”ことだ。

ハンドボール部専用の練習場所を確保するため、青雲寮横の雑草だらけの空き地と、使われていなかったプール横のテニスコートを、顧問である森田先生も含め、部が一丸となって整備した。おそらく全国的に見ても、練習場所を一から作った経験のある高校生は決して多くないであろう。このような経験があったからこそ、社会に出てからも、少しくらいの逆境ではめげず、何事も前向きに考えてこれたのだと思う。

私は今、そんな思い出のある学校で事務職員として働いている。一から作った練習場所も今ではコンクリートで固められ、一方は学生用の駐車場として生まれ変わり、もう一方は民間企業の建物が建っている。今のハンドボール部は、体育館使用のローテにも入っており、公式戦でも勝利を収めているようだ。

練習場所や勝利のトロフィーといった、形あるものは残っていないが、創部間もない頃の”軌跡”をこの特別会報に残せることを非常に嬉しく思う。

人生で最も価値のある経験

50M 森山 慎吾

『20-17, Match Point!』…『Game!』…『Match won by 森山さん 佐世保高専!』……

僕は今、(株)日本触媒という化学会社にて化学プラントのプラントメンテナンス業務に携わっており、入社2年目(2017年11月時点)にして7プラントの主担当をしています。入社3ヶ月後ぐらいの時に、?百万円の配管(SUS304)更新を計画したのですが、熱膨張を考慮しておらず曲げてしまいました。めちゃくちゃ怒られましたが、佐世保高専バドミントン部にて培った「なにくそ精神」で日々頑張っています。

2015年8月22日(土)~23日(日)に、第50回全国高等専門学校体育大会が佐世保市で開催されました。九州大会で良い結果が残せなかった私は、開催地枠で出場しました。もちろん開催地枠ですので、出場している選手の中では最弱です。シングルス1回戦は前回大会で3位に入賞した選手で、ほぼ負けを確信していましたが、「最後の試合だから精一杯頑張ろう!」と思って開き直ったらなんと勝つことが出来ました。最後の点を決めた時の観客の騒めきや手の震えを今でも忘れられません。その後も勝利し、最終的には全国3位になることが出来て、「努力は必ず報われる」という言葉は嘘ではないと実感しました。

僕が部長だった時は、バドミントン部の練習メニューは持久力強化に力を入れていました。その為、フットワークやランニングを重点的に行い、シャトルを打つ時間は練習時間の1/3がほとんどでした。僕とともに練習をした人は今でも吐きそうになるでしょう。しかし、そのキツイ練習によって僕は全国3位という忘れることの出来ない経験をする事が出来ました。

佐世保高専バドミントン部に入部し、大変貴重な経験が出来たこと、「努力は必ず報われる」ことを実感出来たことは人生で最も価値のある経験です。



全国高専大会(2015/8/23)

【在校生投稿】

陸上部頑張っています

物質工学科 5年 大塚 ひかり

全国高専大会出場に際しまして、ご支援をいただき誠にありがとうございました。

陸上競技部女子は“みんなで勝つ”をモットーに全員が仲間を信じ、自分の力を出し切ることを目標としていました。その目標通りにみんなが力を出し切り、10点差で総合二連覇を果たすことができました。私にとっての最後の高専大会は最高のものとなりました。

このような結果を出せたのも日頃よりご指導してくださっている先生方、また全国大会に応援に来て下さった加椎さん、陸上部のOBである真弓さん、津田さん、森崎さんそして多大なご支援をいただいております後援会の皆様のおかげです。これからも部活動をはじめ高専生活において一層精進していきますので今後もご支援、ご協力のほどよろしくお願いいたします。



平成29年度高専大会(陸上)

【厦門工学院との交流】

厦門理工学院との日中交流を終えて

専攻科複合工学専攻情報工学系 2年 馬場 康平

私は、厦門理工学院との日中交流に参加し、7月は佐世保で、10月には厦門で交流を行いました。7月には厦門理工学院の学生8名が佐世保を訪れ、学校の授業体験や工場見学などに取り組みました。また休日や放課後には、厦門に派遣される日本人学生などを中心に観光地を案内するなどし、佐世保や日本の文化を紹介しました。

10月には専攻科生6名が約3週間の日程で中国、厦門を訪れました。3週間の滞在では様々な体験をすることができました。中国文化体験や世界遺産にも登録されているコロンス島や福建土楼の観光、厦門理工学院学生の自宅へのホームステイを行うなどし、中国の学生との交流を深めることができました。さらに、企業のインターンシップにも参加し、現地での仕事について実際に体験することができました。

高層ビルが立ち並び整備された厦門の発展ぶりや、携帯電話を活用した決済システムの発達など、成長著しい中国の現状を知ることができたことは非常に良い経験になったのではないかと思います。

今回の日中交流を通して、中国の文化や人、生活など、日本にいたるだけでは知ることができないようなことをたくさん経験することができました。また、中国の友人をたくさん作ることができ、この交流に参加して本当に良かったと思います。

最後になりましたが、本交流に多大なご支援を頂戴したことを心より厚く御礼申し上げます。

【学会報告】

2017年9月5日(火)～9月8日(金)

福岡県・福岡国際会議場、国際センター、福岡サンパレスにて

応用物理学会 秋季学術講演会

「水面上パルス放電を用いた水素生成における水溶液の導電率の影響」

専攻科複合工学専攻電気電子工学系 2年 井手 裕介

私は「ナノ秒パルス放電プラズマによる水を原料とした水素生成に関する研究」というテーマで研究に取り組んでいます。本研究では瞬間的に高エネルギーを発生させることができるパルスパワーに着目し、水を原料とした水素生成法を開発することを目的としています。今回は、本手法において水溶液の導電率条件を設定し水素生成への影響を調べた結果、一定の成果が得られたため同窓会の皆様の援助のもと上記タイトルにて応用物理学会秋季学術講演会に参加いたしました。

応用物理学会に参加して、専門の方々から研究に対する意見や質問を多く頂き、研究を客観的に評価して頂いたとともに今後の研究の指針を定めることが出来ました。また、研究発表だけでなくシンポジウムやチュートリアルにも参加させていただきました。来年、大学院へ進学し新たな研究を行う上での基礎知識、研究手法を習得できただけでなく、他分野への知見も深めることができ、非常に有意義な時間を過ごすことが出来ました。

研究発表の場に参加することで、研究の進行状況を確認できるだけでなく自身の研究への更なる理解と意欲の向上につながると強く感じました。今後、私や後輩の学生達が多くの学会に参加するためには同窓会の皆様からのご支援が不可欠です。将来の技術発展、研究者の育成のために今後ともどうかよろしく願いいたします。



実験中の専攻科2年 井手祐介君